

長野県における新種トヨボタニソバについて

上野勝典*・上野由貴枝*

A newly describing species of *Persicaria*, '*Persicaria geocarpica*' in Nagano Prefecture

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

はじめに

タデ科イヌタデ属はオーストラリアや北半球に広く分布し、北半球では約 100 種、日本では約 30 種が報告され（北川 1982）、長野県では 26 種 2 変種が知られている（花里 1997）。トヨボタニソバ、'*Persicaria geocarpica*'、は、2006 年にイヌタデ属の一種であるミヤマタニソバ *P. debilis* に近縁種な分類群として発表され（須山・植田 2006）、近く新種記載される予定である（須山氏私信）。花序が穂状に多くつくことからトヨボタニソバ（豊穂谷蕎麦）と名付けられた。

茎は斜上または地上を匍匐、花は各節から出て複数回分岐した花柄の先に一つのみで、茎頂部では多数の花柄が房状、茎基部の葉腋から出る花序の地上に近いものは、花柄が伸長して地中へ潜り込む性質がある、などとされている。

金沢大の須山知香氏、植田邦彦氏より、長野県と愛知県の県境近くにミヤマタニソバ（以下ミヤマと略記）によく似た新種トヨボタニソバ '*Persicaria geocarpica*'（以下トヨボと略記）があるという情報をいただき、2007 年 10 月にそれを見させていただく機会があった。現地ではミヤマと新種トヨボが混生しており、初めて見たとき、どう違うのか一見してはわからず、どちらもミヤマではないか、というのが第一印象だった。ところが、植物体は地面近くを這い、花柄が長く伸びて花が 1 つだけ付いているなどの特徴を教えられると、それまで同じに見えていた両者が別の種であることがわかった（写真 1）。その特徴は明らかにミヤマとは異なるもので、慣れてくると遠くからでも葉だけで判別できるようになった。その後、長野県内を中心に、愛知県、岐阜県、静岡県と併せて県境付近を 2007 年、2008 年に分布調査を行い、愛知県、長野県、岐阜県の限られた場所に自生が確認された。本報告では、これまでにわかっているトヨボタニソバの分布と自生状況、および特徴について報告する。

分布と自生地の状況

これまで発見されているトヨボの分布の中心は愛知県北部の奥三河から美濃三河高原周辺で、その周辺の県境付近にも分布していることがわかってきた（図 1）。長野県では天竜村神原、平谷村茶谷、根羽村松原、根羽村池の平、根羽村鉢盛山といった、県南部に分布が確認されている（表 1）。県内部に生育しているかどうかは、今後の調査によって明らかになっていくものと期待する。

トヨボの生育地は標高 700 ～ 1100 m の範囲と比較的標高が高く、かつ狭い範囲にある。標高が高くても、チャボイノデやベニシダなどの暖地性の植物が周囲に見られることもあり、暖地性要素と温帯性要素の重なる場所に生育しているように思われる。花期は 7 月中旬から 10 月末までと非常に長く、ミヤマとほぼ一致していた。トヨボは群生する性質があり、生育環境は以下のような 2 種類のやや異なる環境であった。

・大きな石のゴロゴロした溪流脇で、やや流れの緩やかになった砂の溜まったような場所

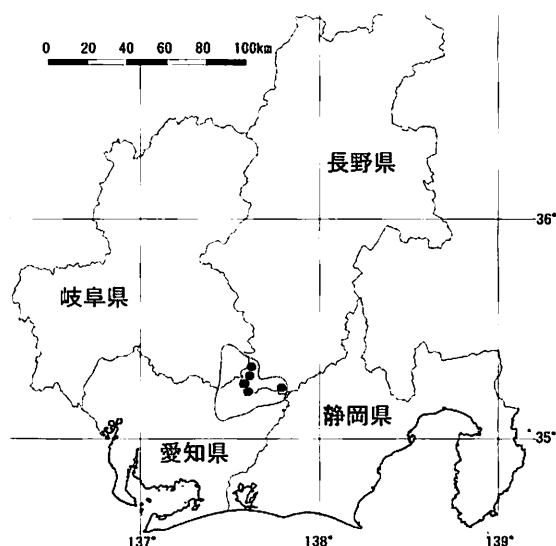


図 1 トヨボタニソバの分布域と長野県内での生育地
点線：今までに確認されている分布域、●：長野県内での生育地（表 1）。地図は国土地理院承認平 14 総複第 149 号を使用。

表1 トヨボタニソバの長野県内での生育地

生育地	標本採集者	標本採集日	標本番号
天龍村神原	上野勝典・上野由貴枝 s.n.	2008 年 11 月 1 日	KANA208051 NAC152941
平谷村茶屋	上野勝典・上野由貴枝 s.n.	2008 年 9 月 14 日	KANA208102
根羽村桧原	上野勝典・上野由貴枝 s.n.	2007 年 11 月 10 日	KANA208054 NAC152911
根羽村池の平	上野勝典・上野由貴枝 s.n.	2008 年 11 月 9 日	KANA208053
根羽村鉢盛山	須山知香・植田邦彦 (C. SUYAMA3087)	2008 年 11 月 3 日	KANA208091

・常に水が浸み出ている湿原の縁で、直射日光があまり当たらないような場所（写真2）

トヨボの本来の自生環境は後者のようで、一面を覆うように旺盛に生育している場所もあり、このような場所から流れだしたトヨボが前者のような溪流で転々と生育していると考えられる。トヨボの生育地では、ミヤマも同時に見出されることが多く、生育環境は似ているが、トヨボはより水の流れのそばの湿った場所を好み、増水するとすぐに水に浸ってしまうような場所で、ときに流れの中に花茎を伸ばしている場合もある。ミヤマはより標高の低いところから高いところまで生育しており、分布範囲が広い。このように、トヨボの自生地は限られた特殊な環境で、水が少なくなると生育に適さなくなり、生育環境が失われてしまう危険性があり、長野県の絶滅危惧種に相当する植物である。

トヨボタニソバの特徴

トヨボはこれまでミヤマと混同されて見逃されてきた可能性が高いと思われるので、ミヤマとの比較をすることでその特徴を説明する。なお、ここで述べるのは、分布調査の中で須山氏、植田氏よりご教授いただいた内容を要約したものである。

植物体の特徴（写真1）

全体の様子を写真1に示した。ミヤマはしっかりと直立または斜上するが、トヨボはミヤマと比較すると茎がやや細く華奢に見え、7月ころの開花直後の時期にはやや斜上するものの、その後は茎が伸びて、地上を這うようになる。地面に近い節の付近から根を伸ばしてさらに伸びていく。各部の特徴は以下のようにになっている。

花の特徴（写真3、4）

花は小さく白い花弁が5枚で、ミヤマとよく似ている。雄しべの数はミヤマが6～8本で、トヨ

ボは5本と少なくなっている。著しい違いは、ミヤマでは節から出た1本の花軸の先から何本も短い花柄が伸びて次々に花が咲いて行くのに対して、トヨボは節から複数の30mmから100mmに達する長い花柄が伸びて、その先に花が一つだけ咲く。稀に2～3個付くこともある。また、トヨボの独特の特徴として、節から地中に伸びた根に交じって、花柄が伸びてその先に花を付けるという性質がある。7月から8月にかけてはこのような花は見られないが、地上を這うようになってくると、ほとんどの株にこのような地中花とよべるような花が見られる。花被片が平開して咲いていることはほとんどなく、つぼんでいる。開いたものはすでに結実したものである。

葉、茎の特徴（写真5-(1)、-(2)）

葉の形に違いは見られないが、トヨボの葉面の色はより濃い緑色で、やや黄色みのある緑色のミヤマとは慣れてくると遠くからでも区別できる。さらに、葉面にある紫色の斑紋は、ミヤマでは一つにつながったV字形の模様だが、トヨボではより細かく分離しており、この模様の様子によって葉だけでも区別可能である。この紫色の斑紋は、トヨボではより色が濃くはっきりしており、葉の裏側ではミヤマよりも濃い色になることが多い。

茎は、トヨボはやや細く華奢である。茎には下向きのとげがあり、触るとすぐにとげを感じることができる。ミヤマはとげがほとんど無く、触ると滑らかな感じがするので、茎を触ってみれば違いはわかりやすい。

ミヤマでは托葉鞘が葉化することがしばしばあり、トヨボでも葉化することがあるが、ほとんどが茎の下部のみである。ミヤマの葉化した托葉鞘の縁にはわずかに短い毛がつき、トヨボではより長くはっきりしている。

以上のミヤマとの違いを表2にまとめた。



写真1 トヨボタニソバの植物体全体



写真2 自生地環境 天龍村神原周辺



写真3 トヨボタニソバの花



写真4 トヨボタニソバの地中花



写真5-(1) ミヤマタニソバの托葉鞘



写真5-(2) トヨボタニソバの托葉鞘

表2 ミヤマタニソバとトヨボタニソバの比較

	ミヤマタニソバ	トヨボタニソバ
花	・雄しべは6～8本 ・節から伸びた花軸の先に複数に分岐した短い花柄、複数の花が頭状につく	・雄しべは5本 ・節や先端から複数に分岐した30～100mmの長い花柄、先端に1個の花がつく
葉	・黄色みのある緑色、V字形の斑紋	・濃い緑色、分離した斑紋
茎	・直立から、斜上 ・とげがほとんど無く滑らか	・斜上から、地上を這う傾向 ・下向きのとげがあり、触るとざらつく
托葉鞘	・葉化し、ふちにわずかに毛がある	・下部のみ葉化し、ふちに長い毛がある
生育環境	・やや高い山地から亜高山 ・日影のやや乾いたところから、湿ったところまで	・標高700～1100m ・日影で、常に水の流れのある湿ったところ
その他	—	・節から出た花柄が地中に伸びる

最後に

本種はその特徴が明確で、慣れてくると遠くからでも容易に判別可能である。今回の長野県南部を中心とした自生地調査は、限られた範囲でしか行われていないので、今後本種が広く認知されてくれば、さらに長野県内での分布状況が明らかになってくるであろう。また、これまでに本種が発見されているのは、限られた標高の特定の環境であることが興味深い。今後、この分類群の起源を解明する研究に大いに期待したい。

謝辞

トヨボタニソバの貴重な情報をいただき、自生地調査へ参加の機会をいただきました金沢大学大学院の須山知香氏、植田邦彦氏には心より感謝いたしま

す。本種に関する貴重な情報をいただくとともに現地調査に同行いただきました豊橋市の吉田豊氏ならびに静岡県伊藤祝氏には、この場をかりて感謝の意を表します。本報告を作成するにあたり、いろいろな助言をいただきました須山知香氏には、重ねてお礼申し上げます。

参考文献

- 北川政夫 (1982) タデ科 佐竹義輔他編 (1982) 「日本の野生植物」草本Ⅱ 離弁花類：14-26. 平凡社.
- 須山知香・植田邦彦 (2006) ミヤマタニソバ (タデ科) 近縁の新種トヨボタニソバ. 日本植物学会 第70回大会 講演要旨集 184.
- 花里弘 (1997) タデ科 清水建美監修 (1997) 「長野県植物誌」：452-474. 信濃毎日新聞社.